

自己決定

2022. 9. 29

生徒指導には3つの機能がある。昔はよく、この3つが言えるように、授業で取り入れるようにと言われたものである。だが、いつの間にか、ほとんど話題に上らなくなった。これらは、今でも十分通用することであり、意識していくべきことである。きっと、不登校やいじめなど、この大原則以外のことが前面に出るようになったのではなかろうか。

3つの機能とは、「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育てる」である。どれも重要である。30歳の頃、大規模校で研修主任を務めていた。あの頃のキーワードと言えば「個が生きる」や「個を生かす」そして「個に応じた指導」だったように記憶している。

50人の先生方を巻き込む研究テーマとして、自己決定・自己選択を打ち出した。画一的な一斉指導により、生徒が受け身になっていた。自然と、講義形式の解説や説明が中心となる授業が多くなっていった。言われたことはやるが、とても主体性など育たないと感じた。

そこで、生徒指導の3機能の1つである自己決定の場を取り入れた。授業の中で、生徒に決めさせる、選ばせる場を設定するのである。私が担当していた国語の授業を紹介する。中学1年生の古典教材に『竹取物語』が出てくる。ねらいは古典に親しむことである。

教科書には出てこない場面を級友に紹介するために、どんな方法がよいかを決めさせるのである。自分で決められる生徒はそれでよい。決められない生徒には、選択肢を用意する。その中から選ばせる。授業をやるのは教室ではなく図書室である。

すると、紙芝居、新聞、スライドなど、様々な表現方法が出てくる。生徒の学習意欲はというと一斉授業に比べて高いのは明らかである。同じ紙芝居を選んだ者同士、アドバイスをし合って、よりいいものを作ろうとしている。発表という学習ゴールがあるため、意欲も持続しやすい。

ここまで大がかりにしなくても、授業の中で選択肢を設定し、自己選択、自己決定を促すことはできる。ちょっとした工夫が、授業を変えていく。そして、生徒が変わっていく。そのためには、準備が必要である。一斉授業よりは準備は増える。だが、その分、効果も大きい。そこをどう考えるかである。

最近のキーワードとして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実がよく出てくる。時代の流れに乗ってICTを最大限に活用した学びが前面に出てくる。個別最適な学びを詳しく見ていくと、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されている。この2つは、私が若い頃にも出ていた。その重要性が意味するところは、昔とは少し変化しているが、幹の部分は変わらない。結局、戻ったというか、再び強調されるようになった。

昔のようにやろうとすれば、きっと破綻する。続かない。そこで今度は、ICTを活用して自己選択、自己決定の場を設けることはできないかと考えた。できそうである。実際、そういった授業を見るようになった。時代は変わっても、自己決定の場を与えることの意義は変わらない。